

# 聞き書き史談ほか萬控え(三)

林 寅 喜

(会員・佐伯市中の島)

## 御朱印道中日記から学んだこと

市立図書館が毎月一回行っている自主事業の一つに日曜文化講座がある。私もこれを受講し始めて足掛け五年になるが、初めのうちはサツパリ分からず、要領を得なかつた。しかし、門前の小僧よろしく習わぬ経も回を重ねるうちに興味も湧き、教材だけでは飽き足らず、島原大変記(一六〇号で紹介)や、天保五人組仕置帳など、独自に求めて手当り次第、解説していた。丁度その頃會員の高宮昭夫氏から声をかけられて、少なからず資料を頂戴し、平成四年の春からは一緒に勉強までさせて貰い、より多くの古文書を読んで今まで知らなかつた郷土史の隅々まで見聞を広め、有難く感謝しています。

そこで今回は今までに学んできたうちの中から平成六

年度に講座のあつた、天保八年十二月、時の家老斉藤多膳が書き残した『御朱印御差登道中日記』を題材として、当時の世相や歴史的背景など、学んだことを気の向く儘に書き綴つて見た。

### 朱印状とは

天保八年(一八三七)四月、十一代將軍家斉が隠居したあと次子家慶が將軍職を継承して、九月二十日に十二代將軍を宣下した。

徳川幕府では歴代將軍が代替りしたあと、全大名に対し付与していた判物と朱印状は、更新するのが習わしであつた。

この判物や朱印状は、幕府が大名の所領を封与するために発行していたもので、その種類及び対象となる大名は次のように決められていた。

一、判物御字御判 十萬石以上で三位中将以上の大名  
一、判物御判 十萬石以上で四位中将・少將・侍従

と五位無官の大名但し、十萬石以下でも四位侍従は同扱いとされていた。

一、朱印状 十萬石以下で四位・五位の無官の大

名

佐伯藩は二万石の五位無官であったから朱印状が付与されていた。これが將軍の交代によって再交付されることとなり、同年十月五日付けの飛脚便をもって、江戸藩邸から差し登らすよう要請されたと書いている。

### 道中の人数と経路

当時藩主高泰（十一代）は在藩中であつた。そこで朱印状は家老斉藤多膳を長として、目付明石大助並びに、翌天保九年から江戸勤番となつていた徒士野村貫左衛門を、宰領及び総賄方書き役として同行させ、ほかに組下の者八名を警護と諸用のため差し添えることとし、二ヶ月後の十二月五日（現暦一月一日）、大勢の家臣に見送られて出発している。

高泰は出発に先立ち、道中は前例にならつて海路を取らず、陸路を行くよう指示している。これは万一海上遭難等によつて朱印状を紛失する事態が発生すれば、佐伯藩は取り潰されると考え、大事を取つてのことであらう。それにしても佐伯から江戸までの陸路三百里は大変な道程りである。そこで全行程を見易くするため参考図書と調べ合わせて別表(一)(二)を作成した。但し、佐伯から小倉までの道程りはこれ等図書にもなかつたので、日記に

したがい書き綴つていくことにする。

### 豊前豊後路

十二月五日十時頃、大勢の家臣に見送られて佐伯を出発した一行は、床木から今はダムの湖底に沈む谷間の道を登り、沓切りから左に曲がつて彦岳の峰続き西約三軒の鏡坂峠を越え、津久見の鍛冶屋に下りてその夜は西郷大庄屋方に宿泊、翌日早朝そこを發つて臼杵領に入り、江無田から九六位山の屋根（今の県道大分臼杵線添い）を越えて高田（鶴崎）に泊まり、翌七日は松岡（大分市明野）から府内城下を通つて海岸添いに別府に出て、亀川から日出領に入つて小浦に宿泊、翌八日は豊岡から赤松峠（當時この峠道は開設されてなかつたのではないか）には行かず鹿鳴越えをして中山香に下り立石に出ている。あとは概ね今の十号線に添つて進み、宇佐・行橋と泊まりを重ね、十日夕方五時頃小倉に着いているから、佐伯小倉間に五日要したことになる。もつとも、こ



の間の距離はよく分らないが、現在の日豊線でも小倉・佐伯間が一九七・八軒であるから、二〇〇軒(五十里)を超えたことは確であろう。したがって、一日当たり十里(四〇軒)以上歩いてた計算になる。一方、天気は六日・七日が晝から雨、八日が晴で九日は曇時々雨、十日は雪と書いているから、必ずしも条件の良い旅ではなかつたようだ。

### 中国路

十一日は小倉から舟で下関に渡って早めに投宿し、翌日から中国路の旅が始まった。別表(一)は下関から大坂までの四七次一二九里を日記にしたがい、宿駅ごとにまとめた見た。

一行は十二日早朝下関を出発して十六日目に大坂蔵屋敷に着いているが、道中では山坂が多くその上悪路に悩まされたと書き留めている。また、平野部では佐伯と違う土地柄とその広さに驚き、一方では果てしなく続く塩浜(塩田)や宿駅の繁盛振



りとか、諸藩の居城等目の当たりにしてその広大さに目を見張るなど、初めて見る他国の様子を詳しく傳えている。

大坂では佐伯との連絡や、東海道筋の宿駅に対し予泊飛脚の差し立てなど必要な手続きを済ませ、二日後の二十九日蔵屋敷を出発したと書いている。

### 東海道筋

別表(二)は大坂より大津を経て鈴鹿峠を越え、桑名から佐屋(名古屋市)回りをして江戸までの、六三次一三八里二六丁を宿駅ごとにまとめたものである。

ところで、出発して二日目の旧正月元日、草津を発って伊勢路に入った一行は石部から水口へと進んだが、元日故か何処の家も戸を閉めて人通りもなく、晝休みの場所さえ事欠く有り様となり、宿外れの立場(宿駅の前後中間にある小駅で、普通掛茶屋があつて旅



関

人に茶菓を提供していた)で頼み込み、漸く食事に有り付いたが寒気が厳しく、鈴鹿を越えて坂の下に着いたのは十時頃であったと書いている。日記によればこの日と翌二日は一日のうちでも出発から到着までが十八時間と最も長く、『暫時寝候様にこれ有候』と書いており、寝る間も惜しんで歩き続けていたようである。

二日は坂の下から桑名の間十里二十六丁進んでいるが、石薬師から次の宿場四日市では人馬継ぎせず、桑名まで五里三十五丁通しで歩き、宿に着いたのは十時過ぎであったと書いている。もつとも、四日市では既に日が暮れていたと思われ、しかも正月二日のこと故問屋場が閉まっていたため仕方なく、桑名まで通しとなったのではあるまいか。

翌三日桑名から佐屋に渡る川舟では、大風と悪天候に阻まれて一里手前の焼田に上がり、前日と同じく十時頃宮(名古屋市熱田)に着いたと書い



宮

ている。

そのあと一部予定を変更するなどしながらも、箱根・小田原間では深い積雪に悩まされ、十四日目の十二日午後二時頃、全員無事江戸屋敷に到着したとある。

### 歩速と活動時間の関係

ここで一行が歩いた道程りのトータルを推定歩行時間(一日の活動時間から晝食に一時間人馬継ぎは一ヶ所当たり三十分として計算し差し引いた)で除して見たら、中国路(一七・二五時間)では平均歩速が三籽なのに対し、東海道筋(一六八・五時間)では三・三籽とほぼ近い数字にはなったが、中国路は山坂が多かったと書いているから、僅かながら差が出たのかも知れない。

人の歩速は平均して一分間に八〇歩から九〇歩という。これを時間当たりになると三・三六籽から三・七八籽となり(歩幅七〇糎で計算)、平均して約三・六籽となる。一行の場合は山坂を含めての速度でもあり、家老の斉藤多膳は道中馬か籠を利用したと考えられるから、人馬や籠との混成旅行の上に、具足櫃や両掛(衣類や所持品など入れた蓋付きの籠を天秤棒で前後に担いだ)人足まで加わった旅であったとすれば、自ずからこの程度の歩

速になったのかも知れない。

一方、一日の平均活動時間は中国路の二・三時間に  
対し、東海道筋が一四・二時間と一・八時間長い。因みに  
一日当たりの最高は中国路の一四時間に對し、東海道筋  
では一八時間の日が二日もある。こんな日は夕食と入浴  
時間を合わせれば寝る暇など殆どなかつたらう。

### 歩行の力学

現在社会と比べて乗り物など極端に少なかつた江戸時  
代は、余程身分の高い人か金持ちでない限り日常では利  
用することなどなく、自分の足に頼るしか方法はなかつ  
た。しかし、かといって四六時中歩き廻っていた訳では  
ないので、長途の旅に出れば足を痛めることもあつたら  
う。

そこで私の体験など交えながら、歩行の力学について  
少し考えて見たい。

私が体験（四国巡礼）をしたのは八年も前のことであ  
る。先ず初めに人が歩く上で最も大切なものといえばそ  
れは履物であるが、私は以前新聞で巡礼の一部を体験し  
た記者が書いた記事を読んで、少しは知識を得ていたの  
でそれに倣い、靴は底の厚いものを選び靴下も厚手を使

用した。

歩速は平地の場合五軒は歩いていたが、一分間当たり  
では一〇歩前後であつたと思う。したがつて、歩幅は  
七五糎位になる。山坂は二軒前後で平地は舗装されてい  
たが、山坂は砂利道であつた。

歩き始めて四日目位から足全体が腫れ気味となり、熱  
氣を帯びて丸太棒のような感じがしてくると激しい痛み  
を伴つて、歩くたびに脳天まで響いてくる。その頃の足  
裏は土踏まずを残して真白く水腫になり、夜には宿の廊  
下やトイレなど、固い物の上を歩くのに耐えられなく  
なつて、這い廻りたいよう  
な気分になる。しかし、よく  
したもので翌朝出発してから  
四、五百米の間、足を引きず  
りながら歯を喰いしばつて歩  
いていると、そのうち痛みに  
慣れてくるから不思議であ  
る。そう考えると「人間は歩  
くように出来ている。」とつ  
づく感心したものであつ



た。もつとも、一度この難関を越えたとあとは幾ら歩いても、足に負担を感ずることなどなかった。

一行の場合は草鞋に足袋を履いただけで、私のは比較にならないし、道も砂利道ばかりで条件は最も悪い。

そこでこの様なことを知つての上でかしくないが、小倉までの五日間は十二時間前後と、初めは余り無理をしていないようにある。殊に下関からは一日当たりの里程が東海道筋と比べてやや短いことから、足を庇つた上での行程であつたのかとも思う。只、日記には日短の時節であつたからこれでよいのではないかと書いてはいるが。

さて、歩速が五杵位になると真冬でも汗をかくし体力の消耗も激しい。したがって、風邪を引く恐れもなしとはいえないが、一行のように三杵から四杵程度の歩速なら、汗をかく率も低いはずである。

私の場合、一日に歩いた時間はせいぜい六、七時間であつた。これを一行と同じように一二、三時間も続けていたら、途中でダウンしたことは否めないが、ゆつくり歩けば長時間でも消耗は少ないのかも知れない。私は未だかつて体験したことがないので分からないが、誰一人

風邪も引かず落伍者もなく、無事江戸まで着いている。そう考えて見ると、昔の人達は歩行の力学というものを自ずから会得していたのかも知れない。

### 旅宿と旅銀のこと

一行が宿泊した旅宿の内訳を見ると、

豊前・豊後路では庄屋宅に二泊

旅籠に四泊

中国路では本陣・脇本陣に二三泊

旅籠に三泊

東海道筋では本陣・脇本陣に九泊

旅籠に四泊

となつており大半は本陣・脇本陣を利用している。

もつとも、この旅は朱印状差し登りの公用旅であつたから、前飛脚を仕立てて予め泊まりを知らせていた上でのことではあるが、それでも到着の際本陣・脇本陣に差し支えがあつて、宿替えを余儀なくされた日もあつたと書いている。

一方、当時の宿賃は一般旅人の場合百内至百二十文であつたというが、一行の



坂 舞

場合は公用旅であったからか、どこの宿でも「南鐮一片（大坂以东では金百疋）下置かれ候に付野村貫左衛門え申渡し相渡させ候」と書いているように、一人当たり幾らの計算ではなく、祝儀として与えていたようだ。但し、金額の方は中国路では南鐮二朱銀一片（後述）であったのに対し、大坂以东では金百疋（一分）と額面上では倍額となるが、何故そのようにしたのか理由は書いていないので分からない。そこでこの問題について私なりに調べて見ることにした。

江戸時代の通貨は大きく分けて大坂以东では金（両・分・朱）本位であったのに対し、以西では銀（丁銀・豆板銀など匁で通用）本位で銭（一文銭）は共通していたが、三貨とも本位貨幣ではあったものの時代によって三貨の対比に変動があり、相場は常に一定していなかった。そこで先ず初めに三貨の公定比率について詳しく書く  
と、幕府は慶長十四年（一六〇九）に「金一両は銀五十匁銭四貫文（四千文）と交換できる」と定めた。そこで当時通用していた小判と丁銀の金銀対比を知るため、含有量の計算をして見たら

慶長小判一両 重さ 一七七四g

純度 八六・二八％  
含有金量 一五・三二g  
重さ 一八七・五g  
純度 七九・二九％  
含有銀量 一四八・四八g

となりその対比は概ね金一に対し銀一〇の割り合いとなった。ところが元禄十三年（一七〇〇）になって金一両は銀六十匁銭四貫文と改められたので、これも計算して見たら

元禄小判一両 重さ 一七・八g  
純度 五六・四一％  
含有金量 一〇・〇四g  
重さ 二二・五g  
純度 六四・六％  
含有銀量 一四五・三三三g

となり対比は一対一四・五と銀の方がはるかに高い。このことは約百年の間丁銀の含有重量には殆んど変化がなかった（全重は変わった）のに対し、小判の方は随分質を落としている（全重は変わらない）から、それだけ一両の値打ちは下がったともいえる。

そこで今度は天保元年から八年にかけて通用していた三貨の相場、金一両は銀六五・三匁銭六六〇〇文を基準にして当時の通貨をもとに計算して見たら

文政小判一両

重さ 一三・〇九g

純度 五六・〇五%

含有金量 七・三四g

文政丁銀(六五・三匁) 重さ 二四四・八七g

純度 三五・二五%

含有銀量 八六・三二g

となり対比は一对二・八と元禄期同様僅かに小判一両の値打ちが低い。

ところで、この旅で使用した貨幣は南鐐二朱銀と一分金である。南鐐二朱銀には次の二種類があり、八片(枚)で一両に相当していた。

なお、南鐐とは極上の銀をいう。

明和南鐐二朱銀 重さ 一〇・〇五g

純度 九七・八一%

含有銀量 九・八三g

通用 天保十三年まで

文政南鐐二朱銀 重さ 七・五三g

純度 九七・九三%

含有銀量 七・二七g

通用 天保十三年まで

貨幣は新貨が発行されれば旧貨は回収されるのが原則であったが、必ずしも徹底しなかったようである。したがって、中国路で使用した二朱銀は明和か文政のどちらかであったろう。これに対し大坂以东で使用した一分金は、文政二年(一八一九)南鐐二朱銀と同時に改鑄された一分金と考えられるので、その品質を計算して見たら

文政一分金 重さ 三・二六g

純度 五五・六二%

含有金量 一・八一g

通用 天保十三年まで

となる。そこで右の三貨を一両当たりに換算して見たら、

文政一分金 四枚で含有金量七・二四g

明和二朱銀 八片で含有銀量七八・六四g

文政二朱銀 八片で含有銀量五八・九六g

となり、金銀対比は明和南鐐とでは一对一〇・九に對し、文政南鐐とでは一对八・一となる。この値は慶長期



に定めた三貨の公定比率である金一対銀一〇の割り合いに対し、明和南鐐は一致するが、文政南鐐はやや劣る。

そこでかりに中国路で使用した二朱銀は明和南鐐であったとすれば、品質を比較する限りでは一分金と略々同等の価値があったといえよう。つまり額面だけでは物は買えず、銭の値打ちが先に立って経済を支えていた、そんな時代であったと思う。その原因は再三行われた貨幣改鑄である。

幕府の収入は直轄地（天領）から上がる年貢米が主力で、その量は江戸時代全期を通じて左程変わりはなかった。

一方、社会状況と行政

機構は年々変化して予算は膨らみ、その結果大赤字を繰り返していた。そこでこの穴埋めをするために再三行なわれたのが、金銀の量を減じて通貨を生み出す貨幣の改鑄であった。ところが、通貨量が増えればインフレが起き物価は上がり銭



平 塚

の値打ちは下がる。反面通貨の品質によって、それぞれの価値に差が生じたことも事実ではなからうか。ことに大坂以东は金本位、以西は銀本位の経済社会であったと考えれば猶更である。

また、宿場々々では人馬継ぎしたとしているが、こちらは前記のように公用旅であったから、一文も払ってはいなかったと思う。しかし、日記に書き留めている宿泊の祝儀だけを集計しても十兩一分になる。これに晝食代や雑費等に加わえて復路の路銀も見込まねばならず、藩としては思わぬ出費に困惑したことであろう。

何しろこの時期白米一石がおよそ二両（天保八年は打ち続いた飢饉のあとで米相場の変動が激しかった）で買えた頃と思えば、使った金の大きさに察しはつく。

#### 参考図書

江戸時代考証総覧

新人物往来社

「歴史読本」お金の百貨事典

〃 〃

別表 1

## 中国路宿駅里程表

下関～大阪間 129 里

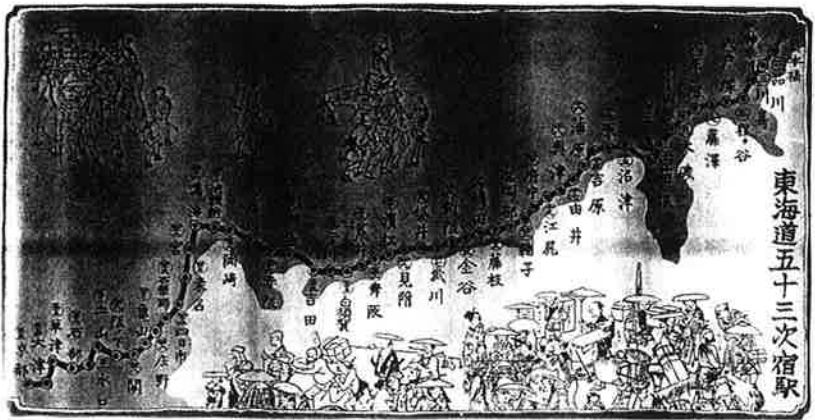
月 日	区 間	距離	出発	到着	活動 時間	歩行 時間	歩速	天気	摘 要
12/12	下関～長府	聖子 2 0	7						下関～旅籠 御手洗屋武左衛門方  (1)吉田宿泊
	長府～小月	2 0							
	小月～吉田	1 0							
	旅籠 福島屋太作方	5 0		15	8	6.5	3.0	晴	
12/13	吉田～厚狹市	2 28	5						曇 後 雨 (2)小郡宿泊
	厚狹市～船木	1 8							
	船木～山中	2 18							
	山中～小郡	2 18							
	本陣 三原屋助治郎方	9 0		19	14	12	3.0	曇 後 雨	
12/14	小郡～宮市	4 18	6						小郡川 佐渡川  (3)福川宿泊
	宮市～富海	2 0							
	富海～福川	2 18							
	本陣 福田四郎兵衛方	9 0		18	12	10.5	3.4	曇	
12/15	福川～徳山	2 0	6						曇夕方雨 (4)高森宿泊
	徳山～花岡	1 26							
	花岡～久保市	28							
	久保市～呼坂	1 18							
	呼坂～今市	18							
	今市～高森	2 0							
	本陣 亀屋市之丞方	8 18		18	12	10	3.8	曇夕方雨	
12/16	高森～本江	18	4						岩国川  (5)玖波宿泊
	本江～関戸	4 0							
	関戸～玖波	3 0							
	本陣 平田半右衛門方	7 18		17	13	11	2.5	朝方雪後晴	
12/17	玖波～二十日市	4 0	5						(6)廣島宿泊
	二十日市～廣島	3 0							
	旅籠 山澤屋久右衛門方	7 0		17	12	11	2.5	晴	
12/18	廣島～海田	2 0	4						(7)四日市宿泊
	海田～四日市	5 18							
	本陣 坪島助七郎方	7 18		17	13	12	2.5	晴	
12/19	四日市～本江	6 0	4						
	本江～三原	2 18							

月日	区間	距離	出発	到着	活動時間	歩行時間	歩速	天気	摘要
本陣	山科屋八十平方	8 <sup>里</sup> 18 <sup>町</sup>		18 <sup>時</sup>	14	12.5	2.7 <sup>K</sup>	曇 後 雨	(8)三原宿泊
12/20	三原 ~ 尾道	3 0	4						
	尾道 ~ 今津	3 0							
	今津 ~ 神辺	4 0							中津和川
本陣	菅並久治郎方	10 0		17	13	11.5	3.5	晴	(9)神辺宿泊
12/21	神辺 ~ 高屋	2 0	4						
	高屋 ~ 七日市	1 0							
	七日市 ~ 矢掛	3 0							
	矢掛 ~ 川辺	3 0							
本陣	灘波惣七方	9 0		17	13	11	3.3	朝方雪後曇	(10)川辺宿泊
12/22	川辺 ~ 板倉	3 0	6						高梁川
	板倉 ~ 岡山	2 0							
	岡山 ~ 藤井	2 0							
本陣	安井虎治方	7 0		17	11	9.5	3.0	曇	(11)藤井宿泊
12/23	藤井 ~ 片上	4 0	4						吉井川
	片上 ~ 三ツ石	3 0							
	三ツ石 ~ 有年	3 0							
本陣	柳原百太郎方	10 0		18	14	11.5	3.5	晴	(12)有年宿泊
12/24	有年 ~ 正条	3 18	5						千種川
	正条 ~ 姫路	3 18							揖保川
	姫路 ~ 御着	1 0							市川
脇本陣	岡村屋庄三郎方	8 0		19	14	12	2.7	晴	(13)御着宿泊
12/25	御着 ~ 加古川	3 0	5						加古川
	加古川 ~ 明石	5 0							
脇本陣	石井五郎兵衛方	8 0		17	12	10.5	3.0	晴	(14)明石宿泊
12/26	明石 ~ 兵庫	5 0	4						
	兵庫 ~ 西宮	5 0							
本陣	松村儀左衛門方	10 0		18	14	13	3.0	晴	(15)西宮宿泊
12/27	西宮 ~ 大坂	5 0	6	14	8	8	2.8	晴	神崎川 十三川
15泊	47 次	129里			197	172.5	3.0		

註1 宿駅間距離と宿駅数は別冊歴史読本江戸時代考証総覧によった。したがって日記の宿駅数とは相違する。

2 歩行時間は人馬継ぎ1ヶ所当り30分晝食1時間として計算し活動時間から差し引いた推定時間である。また日記に記載洩れ或いは日によっては勘案したものもある。

3 摘要欄の河川は川渡しをした所



別表 2

東海道筋宿駅里程表

大阪～江戸間 138 里 26 丁

月日	区間	距離	出発	到着	活動時間	歩行時間	歩速	天気	摘要
12/29	大坂～枚方	5 0	6						
	枚方～淀	3 18							
	淀～伏見	50							
	脇本陣 丹波屋仁兵衛方	9 32							
12/30	伏見～大津	4 8	6						
	大津～草津	3 24							
	脇本陣 大黒屋弥助方	7 32							
1/1	草津～石部	2 25	5						
	石部～水口	3 12							
	水口～土山	2 29							
	土山～坂ノ下	2 18							
	脇本陣 菊屋権右衛門方	11 12							
1/2	坂ノ下～関	1 18	4						
	関～龜山	1 18							
	龜山～庄野	2 0							
	庄野～石薬師	27							
	石薬師～桑名	5 35							
	定宿 升屋傳左衛門方	10 26							

月 日	区 間	距離	出発	到着	活動 時間	歩行 時間	歩速	天気	摘 要
1/3	桑 名 ~ 佐 屋	3 0	6						川舟渡し
	佐 屋 ~ 神 守	1 27							
	神 守 ~ 万 場	1 27							
	万 場 ~ 宮	2 18							
	脇本陣 山城屋吉左衛門方	9 0							
1/4	宮 ~ 鳴 海	1 18	4						
	鳴 海 ~ 地 鯉 鮒	2 30							
	地 鯉 鮒 ~ 岡 崎	3 30							
	岡 崎 ~ 藤 川	1 18							
	藤 川 ~ 赤 坂	2 9							
	赤 坂 ~ 御 油	16							
脇本陣 弓矢十郎兵衛方	12 13	21	17	14	3.5	晴	(6)御油宿泊		
1/5	御 油 ~ 二 夕 川	4 4	6						
	二 夕 川 ~ 白 須 賀	1 16							
	白 須 賀 ~ 荒 井	26							
	荒 井 ~ 舞 坂	1 0							
	本陣 宮崎傳左衛門方	8 10							
1/6	舞 坂 ~ 浜 松	2 30	4						天龍川
	浜 松 ~ 見 付	4 4							
	見 付 ~ 袋 井	1 18							
	袋 井 ~ 掛 川	2 16							
	掛 川 ~ 新 坂	1 20							
	旅籠 大黒屋覚左衛門方	12 16							
1/7	新 坂 ~ 金 谷	2 0	5						大井川
	金 谷 ~ 島 田	1 0							
	島 田 ~ 藤 枝	2 8							
	藤 枝 ~ 岡 部	1 29							
	岡 部 ~ 鞠 子	2 0							
	鞠 子 ~ 府 中	1 18							
	旅籠 松崎屋権左衛門方	10 11							
1/18	府 中 ~ 江 尻	2 29	6						
	江 尻 ~ 興 津	1 3							

月 日	区 間	距離	出発	到着	活動 時間	歩行 時間	歩速	天気	摘 要
1/8 脇本陣	興津 ~ 由井	2 12							薩蛇峠 富士川 (10)吉原宿泊
	由井 ~ 蒲原	1 0							
	蒲原 ~ 吉原	2 30							
	野口曾右衛門方	10 2		19	13	10.5	3.8	晴	
1/9 本陣	吉原 ~ 原	3 6	4						(11)箱根宿泊
	原 ~ 沼津	1 18							
	沼津 ~ 三島	1 18							
	三島 ~ 箱根	3 28							
	石打太郎左衛門方	9 34		18	14	12	3.3	晴夕方雪	
1/10 旅籠	箱根 ~ 小田原	4 8	6	13		7	2.4		雪で難渋 箱根関所
	小田原 ~ 大磯	4 0							酒包川
	山本屋甚右衛門方	8 8		19	13	12	2.7	晴	(12)大磯宿泊
1/11 脇本陣	大磯 ~ 平塚	2 16	5						馬入川 (13)神奈川宿泊
	平塚 ~ 藤澤	3 18							
	藤澤 ~ 戸塚	1 30							
	戸塚 ~ 程ヶ谷	2 9							
	程ヶ谷 ~ 神奈川	1 9							
	大米屋佐七方	11 10		18	13	10.5	4.3	晴	
1/12	神奈川 ~ 川崎	2 18	4						六郷川
	川崎 ~ 江戸	4 18							
	江戸屋敷着	7 0		14	10	9	3.1	晴	
13泊	63 次	138 26			198	168.5	3.3		